
菖蒲の咲く頃に…

水城 流香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

菖蒲の咲く頃に：

【Nコード】

N1205B

【作者名】

水城 流香

【あらすじ】

菖蒲が咲く、美しい季節。だが、この尸・魂界だけは違った。激しい戦争が行われていたのだ。月姫の姫巫女、琥珀。その弟、蒼哉。時代を越えた思いが交錯していく…もうひとつのBLEACHの物語。

Ep1. プロローグ

この世界には、三つの種族が存在していた。それは、古来よりずっとずっと変わらない筈だった。だが、それは世界の均衡と比べれば、恐ろしい程小さい事柄でもあった。世界と人と、どちらを取れと言われたら：どうするのか。今はどうだか知らないが、少なくとも古来の人々は【世界】を取り、あるひとつの種族を殺した。

その名を、【月姫】と言う。

由来は、今でもわかってはいない。それと言うのも、彼らは様々な謎を残して歴史の裏から消えたのだ。【死神】と、大戦争になって、それで皆死んだと。判っていることは本当にそれだけなのだ。ただ、「月の世界から、浄化をするべく神が遣わした者」と、語られてもいる。実際、並の隊長格と同等の力を持っていたと聞く。結局のところ、その力が原因で滅んだ、とも言われてきた。勿論、逆の理論も在ったが、ごちゃごちゃしていて、正しい歴史など、月姫など、初めから無かった様にも思わせられてしまうのだ。実際、今の死神は月姫を知らない。教えられてすらいらない。「汚いものには蓋」ということわざは本当に良く言ったものなのだ。

けれど、真実は必ず在るのだ。どんなに隠そうと、絶対に日の光の下へと照らされる。どんなに汚くても。

5000年もの昔に葬り去られた真実が今、蘇る。

辺り一面に広がるのは、焼け野原。あちこちで小さな子供や、女性の泣き叫ぶ声がある。耐え難い。こんなものは、早く終わらせるべきだ。こんな、戦争。焼け野原に立っているのは、血に塗れた白髪の少女。まだ火がちらちらと在る世界で、自分の生きて来た世界が真っ赤に染まっていくのを、ただ直視しているだけだった。哀しげな表情も無い。涙も無い。何故、これ程までに冷静を保っているのだろうか。

「私も、そろそろ潮時だな・・・」

そう呟くと、すたすたと戦火が残る方へと歩いていった。その眼には、哀しさが僅かに宿る。そして、してはいけない覚悟も。

「・・・蒼哉。今止める」

そう言ったのは、誰も聞こえてなどいない。周りはどう、ぐちゃぐちゃの惨状のみが広がっていたから。季節外れに咲いた菖蒲のみが、真実を知っていた。

「琥珀ーっ！無事ーっ!？」

「ああ、翡翠。大丈夫か。私は平気だ。これっぽっちもな」

声を突然掛けられ、誰かと一瞬仰天した感じの顔になった。だが、あまりにも意外性は皆無。琥珀の親友、翡翠だったから。互いに顔を見合わせて、互いの無事を喜んだ・・・、筈が。

「琥珀ッ！思いつ切り怪我だらけじゃん！何処が平気なの!？」

そう言ったと思ったら、琥珀はひっぱたかれた。パッシーンと、何て景氣に良い音だ。その衝撃で、ぺたんと倒れこむ琥珀。当の翡翠はカンカンに怒っている。むかむかしているのは誰だって解る。それくらいの気迫が漂っていた。恐らく、大抵の者ならその霊圧のみで倒れてしまうに違いない。

「下半身は、無事だが」

「そーいう問題じゃないでしょうがーッ！！全部無事の事を無事っと言うの！！解ってんの!？」

今度は翡翠が泣き出した。余りにもぼろぼろな親友の姿を見て。そして、そんな状態でも平静な琥珀の心を思っ

「……壊れちゃったんだ。どうして……」

「……………」

戦争と言うものは、時には精神すら破壊する。度重なる死神との戦争の末、琥珀の心は壊れてしまった。何が彼女を壊したのかは、誰にも解らないけれど、この現実が真実。『壊れた』って事は。もう、元には戻りはしないのか。人を傷付ける事が大嫌いな優しい琥珀には。大人しく死神に従い、犠牲を少しでも減らそうとした彼女には。

「これが終わったら、元に戻るよね。また、笑ってくれるよね……」
翡翠の眼をした少女、琥珀の眼をした少女。ふたりは親友。いつも一緒。けれど、互いが噛み合わなくなった時、どうするべきか。それを知らない。だから、琥珀は心を壊してしまったのだ。

「みーつけた♪琥珀、搜したさ」

語尾に独特の「ゝさ」を付けて話すのは、琥珀が最も会いたくないと願う人。裏切り者、離反者。いくらでも彼にはクレームが付いている。何故なら、月姫殲滅命令に加担した、月姫のひとりだからだ。……蒼哉。琥珀の弟。

「蒼哉！」

琥珀が叫ぶ。そして、刀を構えた。それを見て驚いたのは翡翠も蒼哉もだ。

「……高槻 蒼哉。離反者として、貴方を斬る。そして、この戦いを終わらせよう」

だが、蒼哉の返答は実に憎たらしく、飄々としていた。そう。この男は姉の琥珀の全てを知っているのだ。だから、この答えも琥珀は予想出来たのだろう。声すら変えて、弟を斬ろうとする姉。哀しい戦いだった。

「誰がお前なんか捕まるのさ。そんな声、怖くも何ともないさ」

「拒否権など、在ると思うのか」

それは、死刑宣告。必ず殺すと、そう言っている。本気で。あの、琥珀が。

「止めて下さい、琥珀姫。蒼哉様を殺せば、貴方は本当に死んでしまわれる」

敬語に、姫に、様。琥珀も蒼哉も、信じ難いと言う様な顔をしていた。何故なら、それを言ったのは、他でもない翡翠だ。元々は琥珀の使いだった、翡翠。だが、琥珀の心情に惹かれて、親友になった。その後、もう敬語などは決して使わないと、固く琥珀に誓っている。己に課した誓いに背き、琥珀に背き。何故そんな事を言ったのか。

「もう、お止め下さい。御自分をもっと大切になさって……」

それは、本心か。もう、誰も傷付くな。自分を大切にしろ。そう、翡翠は言っている。けれど、その想いはふたりには届いていないのだ。この戦争が始まった時点で、彼らは既に人の理を離れている。だから、もう。戦わない、後の世へ。

「我、その血を以って汝に呪詛を課そう。二度と再び戦乱の世へと戻らぬ様に」

翡翠が指を噛み、傷口から血を零す。ぽたぽたと、音を立てて。そして、その血で円を描く。地面に映るのは、何処か別の世界。明るい、陽の当たる世界だった。

<記憶の呪縛>

その術名を詠唱した後、琥珀の世界が変わる。琥珀は自分が白い光に包まれている事に、気が付いたが、もう遅い。全てが遠くなっていく。蒼哉の悔しそうな顔と、翡翠の笑顔。そして、涙を零しているのに気が付いた。

「私、ちゃんと生きているよ。翡翠」

哀しみのみを残し、琥珀は姿を消した。

「ほら、行こう、早く早くっ！遅れるよ、入学式！！」

たたたたと走っていくのは、ふたりの子供。ひとりは黒髪で、もうひとりは白く、琥珀色の瞳をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1205b/>

菖蒲の咲く頃に…

2010年10月28日05時01分発行